

教育雑感 シリーズ 32

～映画「典子は、今」から～



「典子は、今」というドキュメンタリー映画があります。その映画は、1962 年（昭和 37 年）の 1 月に、サリドマイドの影響を受け、両腕の機能を全く失った状態で生まれ、誕生直後その両腕を切断されるという運命の中、母の愛、友達の支え、そして、先生方の温かい見守りを受けながら、生きることへの限りない挑戦をし続ける高校生、典子さんを主人公にした映画です。

主人公の典子さん役を演じたのは、当時 19 歳で、実際に熊本市役所に勤めていた辻典子さんです。そして、この映画は、映画監督の松山善三さんが、彼女のこれまで歩んできた実際の人生に基づき、ドキュメンタリーふう仕立てた不朽の名作です。

映画に出演していた典子さんは、2006 年（平成 18 年）3 月まで勤めていた熊本市役所を退職され、現在は、白井典子さんとして全国各地で講演活動をしています。自らの体験を語る中で、命の素晴らしさを伝えるのが、これからの自分の使命と信じて……。

その典子さんが、数年前、津市で講演をしてくださいました。その講演の中で、典子さんは、とても含蓄のある話をされていました。

彼女の話の中には、学ぶべきものが幾つもあります。その一つとして、当時の担任の先生が、「やれないことを嘆くより、やれることを考えよう」と、典子さんに生き方の視点をプラスの方向に示してくれたという話です。

また、担任の先生の教育者としての信念に基づいた「典子も掃除をしろ」という一言が、それまで本人も含め周りの誰もが、典子さんには掃除ができないと思い込んでいたことに気づかせ、やればできるという人間の可能性を導いたという話は、私達の日々の生活にも大いに取り入れたいものだと思います。

さらに、「私には、人を見極める能力がある」とも言っていました。自らの可能性を切り拓き、今をしっかりと生きていくためには、彼女にとって人を見極めることは、生き抜く上で必要な能力であったのだと思います。



最後に、「私には両腕がないから不自由だと思われるかもしれないけれど、元々両腕がないので、不自由に感じたことはない」と言い切られた言葉が、とても印象に残りました。

講演会后、白井典子さんと夕食をご一緒させていただくことができました。典子さんとお話をしていて感じたことは、非常に素直にこれまでの人生を歩んでこられた方だということです。

私には想像が出来ないほどのご苦勞が、典子さんにもお母さんにもあったことと思いますが、そうしたことを全く感じさせない人でした。終始、穏やかな表情でした。そうした背景は、話が進む中で、次第に見えてきました。それは、次のような内容の話をしてくれたからです。

「私が、これまで差別されたと一度も感じずに生きてこられたのは、母のお陰です。母から、『両腕がない典子が、器用に足を使って何でもやりこなすことに人は感心するだろうけど、それは当たり前のことなの。調子に乗ってはいけないよ』とよく言われました。」

それにしても、娘さんにそう言わしめた典子さんのお母さんは、想像を絶する苦勞をなさったことでしょうが、その苦勞と引き換えに何と親思いの素晴らしい娘さんを得たことでしょう。

そうしたお母さんの原形は、映画にも登場した養護学校小学部の入学をお願いに行ったものの、入学を断られた母子の帰りのシーンからも垣間見ることができました。

それは、我が子の入学を拒否されたお母さんが、誰にもその悔しさと悲しさの入りまじった複雑な思いをぶつけることができず、感情の高ぶりが極限に達した時、まだ小さな典子さんにその思いを激しくぶつけながら、泣き叫ぶシーンです。

おそらく、この時点でお母さんは泣くことを封印し、典子さんの両腕が失われたことを悔やむことから、彼女に残された身体で何ができるのかを考え、立ち上がったのだと思います。それは、幼い典子さんの心にもしっかりと届いたことでしょう。その母子の決意が伝わる、印象的なシーンでした。

食事後、私は、持参してきた本にサインをしてもらいました。私の目の前で、足の指を器用に動かし、「坪井 守 様 今を生きる 白井典子」と書いてくださいました。思い出に残る大切な記念の品となりました。